

てんりやう 暮らしの見本帖

TENRYU WARD
PROMOTION PROJECT
2016-2017

Tenryu Country-lifestyle book
case03「Sounds」



Vol.3

暮らしの中の「音」

Daily Life Sounds
in
Tenryu

暮らしが見える。感じる体温。

Tenryu + Plus

Tenryu Ward, Hamamatsu city,
Japan



このまちの暮らしに

耳をすませば、

聞こえてくるのは、

きつと、こんな音。



暮らしカタログ・暮らし方ログ

「てんりゅう暮らしの見本帖」



homepage



youtube



暮らしが見える。感じる^{ぬくもり}体温。

てんりゅうプラス



暮らしが見える。感じる^{ぬくもり}体温。

Tenryu + Plus

浜松市天竜区

てんりゅう

てんりゅう 暮らしの見本帖 Vol.3



暮らしの中の「音」



contents

暮らしのインタビュー

- 04 シャキシヤキ
- 06 ピッピー
- 08 しんしん
- 10 ハア 細葉しゃくなげ 深山のつつじよ～ サノサッサ
- 12 くるくる
- 14 ピュイー

- 16 てんりゅうプラス コンテンツ



てんりゅう暮らしの見本帖
暮らしの中の「音」

浜松市天竜区役所
〒431-3392
浜松市天竜区二俣町二俣 481 番地
☎ 053-922-0013
E-mail:tn-shinko@city.hamamatsu.shizuoka.jp

HP 検索「てんりゅう暮らしの見本帖」



シャキシヤキ、シャキシヤキ。

玄関から、響いてくるのは小気味よいハサミの音。覗いてみると、いすに座ったお客さんの髪を理容師さんが切っている。

手際よく散髪していく理容師さん。あつという間にすつきり、さっぱり、はい、できあがり。終わったあとは、お客さんもとてもうれしそう。やはり通い慣れたお店の人に髪を切ってもらうのは安心なんだろう。

出張で散髪する理容師さん

ここは、佐久間町浦川という地域にある一軒のお宅。主要道路から少し脇へ坂を登った先にある。眼下には天竜川に注ぐ支流の大干瀬川が流れ、その向こうには浦川の中心部が見渡せる。このお宅に、出張して散髪する理容師さんがいるということを聞き、やってきたのだった。

一台の軽自動車が坂の上に現れ、慣れたハンドルさばきで空き地に駐車する。理容師さんの車だ。理容師さんは、手にカゴを一つ提げて、玄関までの道を軽快な足取りで登っていった。

この理容師さんは、浦川でお店を構える乗本さん。三代にわたってこの地域で理容店を営み、この地域にはもうなじみのお店だ。この日、散髪したのは80代のお客さん。「こんにちは」とあいさつした後、手際よく準備に取りかかる乗本さん。お客さんは、車いすを利用してあるから、それがいす代わり。提げてきたカゴの中から、いつもの道具を取り出せば、その玄関はいつものまにか、理容店に変身だ。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

昔からお世話になってきたお客さん。
出張するのが務めかなって感じたんです。



**お世話になってきた
お客さんへの想い**

「出張で散髪を始めてから、かれこれ10年くらいにはなるかなあ」と乗本さんは話す。乗本さんが出張で散髪を始めたのは、これまでお店に通っていたお客さんが、お店まで来られなくなってしまうという事情があつてのことだ。あるとき相談を受けたことがきっかけで、初めて出張の散髪を行ったという。それ以来、依頼があればお宅まで駆けつけるということが何度かあったという。

「子供のころから、お客さんには、かわい



地域の特長をふまえて

がってもらってきたからね。出張してでも散髪することが務めかなって気持ちがあつたんだよ。地域のお客さんには、いつも感謝の気持ちでいっぱいだからね。三代にわたって理容店を受け継いできた乗本さん。お客さんには、昔からのなじみの人が多い。そんなお客さんが困っている時に、少しでも恩返しができるならば、という気持ちがあつたという。

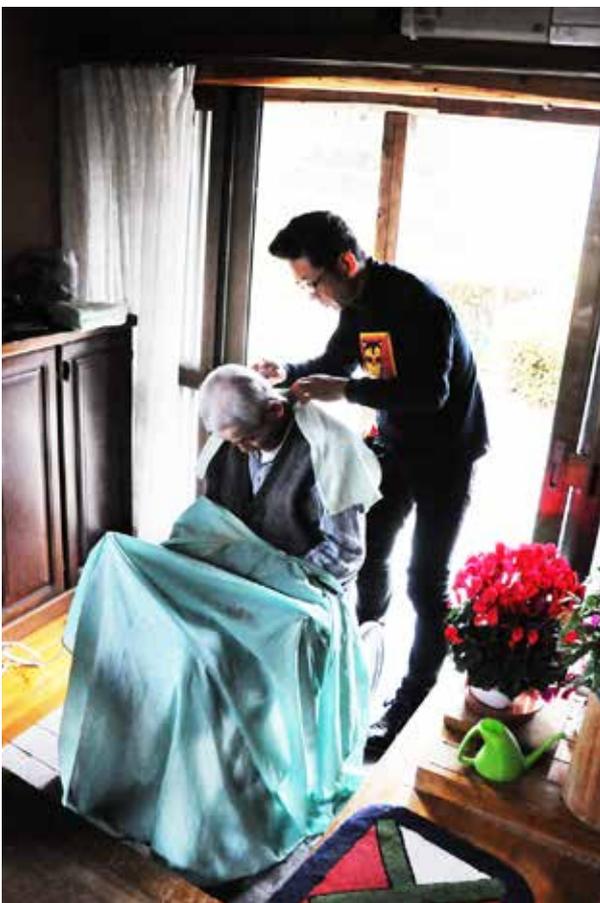
この地域では、坂を登った先に住宅があることは珍しくない。だから、車が運転できないとなったり、移動手段を失ったりしてしまうと、お店まで来てもらうことが難しくなってしまう。「今後は、もっと高齢の方が増えてきて、出張も増えていくのでは」と乗本さんは言う。確かに、ここでも高齢化は、深刻な地域課題の一つ。この「出張する理容師。さん」というのも、高齢化を見据えた、新しい取り組みの先駆けとも言えるのかもしれない。

お客さんの喜ぶ顔

「そうこうしているうちに、散髪は終了。」「ドライヤー貸してもらえるー？」とお家の人呼びかける乗本さんの言葉で、はつとした。ここはお家の「玄関」だった。お客さんは、とてもうれしそうな表情だ。

「やっぱり、お客さんの喜ぶ顔を見ると、うれしくなりますからね」と、笑顔の乗本さん。地域の理容師さんとして、お客さんを大切に思う気持ちが伝わってきた。

今度はどの家の玄関先で、乗本さんが奏でるハサミの「シャキシャキ」が聞こえてくるだろうか。きっと、そこにも笑顔がいっぱいあふれているはずだ。





ピッピー。

響き渡るホイッスルの音。

その音は、朝の澄んだ空気を切り裂き、心が引き締まるような鋭さの中に、どこか温かさを含んでいるように感じられた。その理由は、このあとすぐに分かるのだが、この時その音はサッカーの試合開始の合図を連想させた。

ここは天竜区の山東という地域にある横断歩道。すぐそばには小さな川が流れ、同じく小さな橋が架かる。春になるとこの川沿いの桜が見事に咲き誇り、この道を通る人の目を楽ませる。

しかし、花に見とれていてはいけない。脇見運転は事故のもとである。この道は、山東から春野町方面へ向かう国道。特に朝の時間帯には交通量が多い。近所には小学校もあり、通学路にもなっている。登校時間帯にはたくさんの子供が、この道にかかる横断歩道を渡る。

この道を利用するのは、歩行者ばかりではない。学校へ通う高校生が乗る自転車、路線バス、工事現場へ向かうトラック……。一日中ここへ立っているならば、ありとあらゆる種類の交通手段を目にすることができると言っても、おそらく過言ではないだろう。

そんな交通の行き交う通学路に朝早くから立つ人がいる。ボランティアで交通安全指導員を務めている高橋さんだ。高橋さんは、この横断歩道の押しボタン式信号機の所に立ち、横断する子供たちが安全に渡れるように、交通整理をしている。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

子供たちに安全に渡ってもらう。
それが私の日課ですよ。

「子供たちが安全に渡ることができるように見守るのが日課になっているんだ。小さな子供たちには信号を守る意識をしっかりと身につけて欲しいからね」

高橋さんは、朝6時半頃からここに立つ。子供たちとはすでに顔なじみだ。この日、最初の子供がやってくる。「おはよう」「おはようございます」とお互いに大きなあいさつを交わすと、高橋さんは「あの子はいつも早く来るんだ。それで、あそこの石に座ってみんなに元気いっばいのあいさつをするんだ」そんなことを教えてくれた。

横断歩道の両端から子供の集団が現れる。「今日はどっちの地区の子供が早いかな」毎日、この場所に立つ高橋さんは子供たちのことをよく見ている。「最初の頃、子供たちは私のおまわりさんだと思っていたみたいだね。でも今ではおじさんって親しみを込めて呼んでくれるよ」と少しうれしそうに話す。

朝の空気を震わせるホイッスルの音、交わされるあいさつ……。ここは、音と笑顔の交差点。高橋さんにとっては、もはや当たり前となってしまうたというこの朝の日課だが、そのおかげで子供たちは安全に安心して横断歩道を渡ることができる。

一日の始まりの、ほほ笑ましい光景だ。今日も高橋さんのホイッスルの音が横断歩道に響いている。





『しいたけの音』を求めて

「しいたけの音がするんですよ」

そんな一言が印象に残っていた。それは、春野町を訪れた時に、たまたま聞いた言葉だった。その時には何でもないと思いき、それ以上は気にも留めなかったが、時がたつにつれ、そのことが気になって気になって仕方がない。しいたけから音がするとは思えない。何とも不思議な話である。

そんな訳で、その音の話をしていただいた増田さんを訪ねることになった。

増田さんは春野町の杉という地区でしいたけ栽培をしている。ここは、近くに自然体験施設があり、周囲の山を見渡せる、まさしく自然があふれる環境の地域だ。晴れた日には思わず「ヤッホー」と叫んでしまいたくなるような景色が、そこには広がっている。

こだわりの原木栽培

増田さんのしいたけ栽培は、昔から続く栽培方法である「原木栽培」だ。切り出したコナラの原木に穴をあけ、その穴にしいたけ菌を付着させた種駒を打ち込んでいく。そこから、しいたけ菌が原木に行き渡り、しいたけが生えてくる。簡単に言えばそういうことになるが、その間には数えきれない工程があり、良いしいたけを作るのはなかなか難しい。時間も手間も多くかかる。その分、肉厚で歯ごたえのあるしいたけができる。そんな原木栽培は常に自然との戦いである。いつも同じようにやっていたら必ず良いしいたけができるというわけではない。

「原木ってね、どこの山にでも置けばいいとい

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

五感を使ってやる仕事。
それが、原木栽培。

う訳じゃないんだ。しいたけ菌の育つ環境をこつちから作ってやらないといけない」雑菌はしいたけの天敵である。しいたけ菌が良く育つには、雑菌が繁殖しない環境が求められる。ここからが自然との戦いだ。「風通しが良い環境を作らなければいけない。そのためには、たとえば雨がどのくらい降るだとか予測して原木を並べる高さを変えるんだ。どうやって予測するかって？昔からよく『梅の花が上を向いて咲くと空梅雨、下を向いて咲いたら雨が多い年だ』っていつてね」そういつて増田さんは近くの梅の花に目をやる。「まあ、梅雨の時期にはどうだったか覚えちゃいないんだけど。それでも花を見て、今年は雨が多いのかなあ、くらいのは思うがね」そういつて増田さんは笑う。そんな昔からの知恵がここには今もたくさん伝わっているというのだ。

「昔はさ、本当に自然の様子やその変化を敏感に感じ取っているんな事が分かったんだろうね。まさに五感を使つてね。原木栽培もそう。原木栽培は『感じてやる仕事』なんだ」

自然に対して五感のすべてを働かせてやってきたのが原木栽培だ、と増田さんは言う。

「感じる音」

そこで「しいたけの音」のことを思い出し、増田さんに尋ねてみると、こんな



話をしてくれた。「あれは、夏の夜だったね。周りは物音一つない、風もない、そんな夜だった。そんな中でしいたけの様子を見たんだ。そしたら胞子がフワッと霧のように舞っていてね。それが漂っていたんだ。その時に『音』がしたんだ。「しんしん」という風に。これはね、伝えるのが難しいんだけど、耳で聞くんじゃない『感じる音』なんだ」

自然には敵わない

「目には見えない気配なんかを伝えていくのも大切だと思ふよ」と増田さんは続ける。「遠くの山に霧がかかると、こっちは雨が降らないって言ったこともあったね。「よく、おじいさんがそんなこと言つてたつけなあ」って、思い出すね。昔は自然に合わせて生きていたんだな。

今は人間の都合に合わせていろんな事ができるようになったんだけど、増田さんはそういつて、山の向こうを見つめて目を細める。「やっぱり自然には敵わないよ。しいたけ栽培だって『勤』と『五感』の世界だから、当然うまくいかないことだってある」

しいたけの音。

それは耳で聞く音ではなく『感じる音』だった。自然の中で五感を使つて原木栽培を続けてきた増田さんだからこそ見つけられた、音、なのかもしれない。

数えきれないほどの原木が並んだ山の中で耳をすますと、たくさんの音を「感じる」ことができる気がした。





ハハア 細葉しゃくなげ 深山のつつじよ
サノサツサ

どこか懐かしさを感じさせるメロディが風に
乗って聞こえてくる。そう「龍山音頭」のメロ
ディだ。その音が聞こえたら、みんな集まって
くる。みんなそれを待っている。週に一度のお
楽しみ。やがて移動販売のトラックが姿を現す。

龍山町の移動販売

ここ天竜区龍山町は、人口700人弱。過疎、
高齢化が深刻な課題となっている地域だ。さら
に、集落は山を登った先にあることが多く、買
い物へ出掛けるのもひと苦労だ。

そんなこの地域では、買い物手段の一つと
して移動販売が行われている。移動販売といっ
て真っ先に浮かんだのは石焼き芋の掛け声ら
いなものだったが、ここの移動販売は、まさに
「何でも屋さん」である。そして、物を売るだ
けではない、この地域特有の役割を担っている。
そんな移動販売の様子に密着した。

山里に現れる青空マーケット

移動販売は、集落毎に、週一回やってくる。
この日、移動販売がやってくるといふ集落を訪
ねると、そこにはすでにお客さんが待っていた。
畑の脇にある大きな石の上に二人で腰掛け、甘
夏をゆつくりと時間をかけて食べている。これ
だけでも、絵になる風景だ。「食べんかね。ち
よっと、すっぱいけど」と、見ず知らずの私に
笑顔で甘夏を勧めてくれた。

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

「うちの庭で買い物ができる楽しみ」
それが受け入れられているんでしょね。



そこでのんびりと話をしているうちに周囲の静寂を破って、遠くからかすかにメロディが聞こえてくる。その音は徐々に近づいていく。そう、このメロディこそが噂の龍山音頭である。

と、次の瞬間。さっそうと軽トラが広場に現れる。トラックから、手際よく品物が運び出され、並べられていく。あつという間にそこはお店へと早変わりしていた。気がつく、最初は2人だったお客さんが、1人、また1人と増え、5人ほどに。皆、おのの品物を手に取っては買い物かごへ入れていく。夕食の材料、不足してきた雑貨……。周りが山や畑に囲まれていることを除けば、スーパーマーケットで良く目にする光景だ。

「毎週こうやって来てくれるから本当に助かっているのよ。みんなで集まって買い物ができる。そういえばあそこの家の人は今日は来ないねえ」そんな会話も聞かれた。

全員の会計が終わると、品物は再びトラックに収められた。そして車は、次の場所へと向かう。辺りは、再び静寂に包まれた。

地域への感謝の気持ち

この移動販売を行っているのは、龍山町の瀬尻という地区で商店を営む片桐さん。この商店の三代目だ。「自分が子供の頃からお世話になっているお客さんが、高齢になって、買い物に来れなくて困っている。昔からのお得意さんを大切にしたいと思って、移動販売に行き着いたんだ」ときっかけを語る。「昔は、注文をとって配達するっていうことをやったんだけど、『買い物』ができるようにしたいと思ってね。見る楽しみ、選ぶ楽しみも大切だと思うからね。それが受け入れられている理由でもあると思うよ。」

「見守り」という役割

さらに、片桐さんの移動販売は「高齢者の見守り」を兼ねていることが特徴的だ。この見守りは、地元のNPO団体の事業の一環として行われているものでもある。「お得意さんが出て来ない日はやっぱり心配でしょう。家の中でどうかしてるんじゃないかって。だから、そんなときは家まで行って声を掛けるんですよ」

龍山町では高齢者のみの世帯も珍しくはない。そんな地域の皆さんが、健康で暮らしているかどうか、見守る役割もこの移動販売では担っているのである。

「あとは、お客さんとの会話も大切。世間



話をしたり、近況を報告し合ったり。あそこの人がどうした、こつちの人がどうしたって、連絡係も兼ねているかな」

お客さんも買い物や世間話を楽しんでくれるという。「やっぱり、車を運転できない人が喜んでくれるね。いつも待っていてくれるんだ。「うちの庭でこんな面白い物ができるなんて」ってね」

移動販売のこれからを思う

「やっぱり休んじゃ悪いなあって思うでしょ。みんな困っちゃうと思うと。でも身は一つだからね・・・」と、片桐さんは、これからのことも考える。「今のうちに、誰でも配達できて、週の回数も増やせるような仕組みを作ることができればね」とこの地域での移

動販売のこれからのことを話す片桐さんの目は真剣だ。

片桐さんの目標は、遠くへ出掛けないと買えないものをこの移動販売でも不自由なく買えるようにすることだ。そのためには、まだまだ具体的な方法について検討を重ねていかなくてはならない。しかし、この地域で暮らす人のことを考えれば、この目標は、切実だ。

買い物の楽しみを、この山里でも味わうことができるように。

今日も「龍山音頭」のメロディを響かせて、片桐さんの車は、買い物を楽しみに待つ、たくさんの人のもとへ向かって走っている。





♪ 静かな湖畔の森の影から、
ろくろがまわる音がする♪

月に住む陶芸家

月に住む陶芸家がいる。

月までの距離は地球からおよそ38万キロメートル。アポロ11号が月面着陸を果たしているが、陶芸家が住んでいたなんて報告は聞いたことがない。いったいどういうことだろう。

ダム湖畔の静かな場所「月」

「月」というのは、天竜区にある地名だ。名前も美しいが、景観も美しい。一級河川の天竜川にある「船明ダム」のダム湖畔に位置する地域だ。普段は静かな場所です、耳をすませば風の音、木々のざわめき、鳥のさえずりなどが聞こえてくる。

このダム湖は、ボート場として活用されていることでも有名で、春には、毎年、高校生の全国大会が開催される。「ボートの聖地」とか「ボートの甲子園」という異名を持っている。その一角に工房を構えるのが陶芸家の山口さんだ。

陶芸との出会い

山口さんがろくろを回すと、あっと言う間に粘土の塊が美しい器へと形を変える。一つのお皿を作るのに2、3分とたったところだ

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

何かというともみんな協力して動ける。
そんないい所ですよ。ここは。



ろう。

山口さんが陶芸と出会ったのは、伊賀焼の窯元だった。そこで作品を見て衝撃を受けたという。「その時には、見るのが好きになっただけでしたがね、勤め始めてから、ちょっとやってみたくなりました」

初めは、通信教育などを利用し、自分で楽しむだけだった。やがて本格的に作品を作りたいと思うようになったという。「やるんだったら今しかない、と思いついてね。『自分で物を作って人に喜んでもらう』。そんな生活ができたらいいなと思っただけです」

長野、福岡でそれぞれ師事し、腕を磨いていった。



天竜への移住

やがて独立するときに来る。そのとき、工房を構えるための空き家を探し、たどり着いたのが天竜区(旧天竜市)の熊という地域だった。「うれしい事に、地域の皆さんからは歓迎されましたね」移住当時の事を山口さんはそう振り返る。

熊での生活していたときには、折に触れて地域の人のやさしさに触れたという。「畑の管理の仕方から肥料のやり方、収穫時期まで面倒を見てくれた。食べきれないからと野菜をもらうこともありました」

熊での生活は、8年間続いた。

月での暮らし

その後、山口さんは現在の場所に工房を移した。この場所を紹介されたときにはすぐに「いいところだ」と思ったそうだ。「景観も日当たりもいい。車があれば不自由は感じないですからね。作品を作るにもいい環境です」

ここを訪れるお客さんも同じことを口にするという。「いい場所ですね」と必ず言ってくれます。「のんびりしてつい長居をしてしまう」と。そういう時間や場所を提供できるのもいいことだと思っていますね」

普段は、とても静かな場所だが、さみしさは感じないという。夕方になると、ポト部の高校生の声が聞こえるからだ。そして、大会が行われる時期になると、とてもにぎやかになる。



地域みんなが協力する生活

山口さんにここでの生活について尋ねてみた。

「この地域の人はね、何かというところまで協力して動けるんですね。例えば冬ですと今夜あたり道が凍りそうだなってときがあるでしょう。そんな日には電話で『どうしようか?』って相談して、みんなで融雪剤をまくんです。あれは、重たいんですがね。みんなでまく。早朝から出掛ける人だっているわけですからね。みんなのために動いてくれる人がたくさんいるんですよ」

もちろんこの地域だって高齢化の課題は避けられないという。でも、地域みんなが協力しようというまとまりを感じさせる。ここでは、地域の繋がりが輪になって巡り巡っているのだろう。





中心街の住宅地に、サルやイノシシが現れるとニュースになるが、天竜区にはサルやイノシシ、シカなどの野生動物を目にするのが当たり前。暮らしがある。

狩猟をする人たちの生活だ。

狩猟の音

狩猟をするときの音と言えはまず浮かぶのが鉄砲の音。鉄砲の音って何だか物騒である。しかし、狩猟をするときにはまた違う重要な役割を持つ。音があるという。

天竜区の最北端に位置する水窪町。その水窪町の中心部からさらに北上した所にあるのが西浦という地域だ。水窪町は比較的温暖な気候といわれる浜松市の中では珍しく、冬には雪が積もることもある。その冬の日に、古い伝統を持つ芸能の「西浦田楽」が行われることでも有名だ。家のつくりや畑のある風景を見ていると、どこか懐かしい気持ちになってくる。そんな地域だ。

この地域で暮らし、長年に渡って狩猟に携わって暮らしてきた笹下さんに聞いてみた。

音は重要な合図

笹下さんは、昔から狩猟に携わってきたベテランの猟師だ。

現在では、GPSを利用することで、獲物を追うことが比較的楽になったが、音（ヤマトウシ）が重要な合図になっているという。空の葉莢（エノコ）を笛にして吹くことで自分の居場所を伝えるのだ。「GPSなんかなかった頃は、獲物を捕らえた時にはそれが合図の方法だったんだ。その音だけでどの方角から聞こえるかを探して。今思うと良くやったと思うけどね」その笛

暮らしが見える。感じる体温。



Tenryu + Plus

狩猟の方法も意味も変わる。
今の猟師は重要な役割を担ってるんだ。



の吹き方を使い分けて合図をするという。「こ
うやって吹くと『こっちへ来い』という合図な
んだ」と、ビュイーとその音を何度か鳴らした。

狩猟の方法

狩猟の方法は、集団で行う方法、一人で行う
方法などさまざま。シカやイノシシを狩る場
合は、集団で目星をつけた山を半日くらいか
けて回る。足跡を探して、その山にいるか、いな
いかを調べる。もし獲物があることが分かれば
「巻狩り」といって、獲物を少しずつ追いつめ
ていく。また、犬が活躍することもある。この
場合には、犬の種類によって特徴があり役割が
変わってくるという。「優れた犬がいると成功
率があがるんだ。鉄砲の腕より犬の方が大事っ

てくらいだね」

狩猟と一口に言っても奥が深いことが分かる
話だった。

狩猟の思い出

水窪にはかつて、集落ごとに狩猟をするグル
ープがあったという。最近では猟師が減ったこ
ともあり、いくつかのグループが一緒に狩りを
することが多くなった。

「昔は、たくさんさんのグループがそれぞれ縄張
りを持っていた。『ここは自分たちがやるんだ』
って早くから見張りをつけるほどだった」そ
の頃は、地域の外からも狩猟のため訪れる人が
いたという。

「その頃は面白かったよ。獲物も少しはお金に
なったし。売れない部位はみんなで煮て食って。
それがまたうまかったんだ。それが猟師の特権
みたいなもんだったよ」

そんな思い出話をする笹下さんは、本当に楽
しそうだった。

変わる狩猟の意味

そんな狩猟は、時代とともに役割も変わって
きたという。「昔はね、趣味で狩りをするこ
ともよくあることだったからね・・・」今は、増え
過ぎた野生動物を減らすために狩りを、せざる
を得ないケースが多くなったという。「そう
いう意味では、今と昔では、狩りをするこの
意味も様変わりしているんだ。地域で猟師は減
っているけど、生活を守るという役割が重要に
なってきた」

昔は今と比べて、畑など人の暮らす場所で野



生の動物を目にすることが多くなったと笹下
さんは言う。「シカも増える。サルも家の外
の木で見かける。山から下りてきてエサがあるこ
とを覚えてしまったんだろう。畑の作物に被害
を与えることもある。姿は見かけないのに、い
つの間にか食べられていなんてこともある」
人間と野生動物との領域もここでは変わりつ
つあるのだ。

時代とともに狩猟の方法も意味も変わって
いく。また、自然との距離も変わっていく。動物
は増えるが人は減る。生活への影響だつてもち
ろん出てくる。それでも変わることなくこの地
域での暮らしは続いている。

山の中では、笛の合図が変わらず響いている。



どんな音が聞こえますか？



Daily Life Sounds
in
Tenryu

あなたの暮らすまちでは

暮らしが見える。感じる^{体感}体温。



Tenryu + Plus

Tenryu Ward, Hamamatsu city,
Japan